



責任編集 平野 謙 蔵原惟人
小田切秀雄 野間 宏 竹内 好

日本加レタ文学大系

2

運 動 成 立 の 時 代

「文芸戦線」創刊からナツプ成立まで

三 一 書

日本プロレタリア文学大系 2 定価二二〇円

一九五四年九月三十日 第一版発行
一九六九年二月十五日 第三刷発行

編者代表 野 間 宏

発行者 竹 村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三三三〜五
振替東京 八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷 文栄印刷株式会社
製本 有限会社 佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

第二卷

「運動成立の時代」

凡 例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねものとすとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアンソールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によつたが、ときに執筆年月によつて配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第二卷 目次

I 小説

淫 売 婦	葉山嘉樹	三
電 報	黒島伝治	一六
土に生く	大田 卯	三三
屋根裏から微かに漏れる言葉	中西伊之助	三七
馬	徳 永 直	三八
女工哀史抄	細井和喜蔵	四三
地平に現れるもの	小 島 島	四七
セメント樽の中の手紙	葉山嘉樹	七一
林 檜	林 房雄	七四
一兵卒の震災手記	越中谷利一	八〇
苦力頭の表情	里村欣三	八六
人を殺す犬	小林多喜二	九六
散 弾	藤森成吉	一〇一

櫛		黒島 伝治	一〇六
施療室にて		平林たい子	一一八
交番前		中野重治	一三三
キャラメル工場から		佐多 稻子	一三六
線路工夫		山内 謙吾	一四一
滝子 其他		小林多喜二	一五五
標的になった彼奴		立野 信之	一六八
放浪記抄		林 芙美子	一八二

II 評論・声明書

「文芸戦線」以前		青野 季吉	一九二
文芸戦線社同人及綱領規約			一九三
啄木に関する断片		中野 重治	一九四
万国の革命的プロレタリア作家に檄す			二〇一
「調べた」芸術		青野 季吉	二〇三
日本プロレタリア文芸連盟規定草案その他			二〇六
文芸家と社会生活		山田清三郎	二一〇
文学運動の中心点		山内 房吉	二二三

目的意識論	自然成長と目的意識	青野季吉	二四
社会主義文芸運動	自然成長と目的意識再論		二〇
所謂社会主義文芸を克服せよ		鹿地 亘	三三
自然主義文学の消長		蔵原 惟人	三五
芸術に関する走り書的覚え書		中野重治	三二
文芸評論		片上 伸	三八
無産階級芸術運動の新段階		蔵原 惟人	三六
現代文学者の階級的性質		青野季吉	三五
無産派文芸家討論会	青野季吉・麻生義・小堀甚二・萩原恭次郎・ 佐々木孝丸・片岡鉄兵・林房雄・勝本清一郎・ 中野重治・大宅壮一・鹿地亘・その他		二六九
日本左翼文芸家総連合なる。経過・宣言・規約		平林初之輔	二九二
プロレタリア文学運動の理論的及び実践的展開の過程		小明山明敏	三〇五
無産派芸術家諸団体分裂の意義		壺井 繁治	三〇九
政治と芸術の問題その他		高見 順	三七
我国に於ける尖端芸術運動に関する一考察			

III 詩・詩論・短歌・俳句

詩

杉よ！ 眼の男よ！	中 浜 哲	三二
無 題	萩原恭次郎	三三
吹雪の葬式	渡辺信義	三三
櫓	渡辺信義	三六
雪の線路を歩いて	後藤謙太郎	三七
採炭夫のうた	後藤謙太郎	三七
サッコ、ヴァンゼッチの死	小野十三郎	三八
断 崖	小野十三郎	三八
虐無主義に	小野十三郎	四〇
百姓は生さず殺すな！	波谷定輔	四〇
罵倒と迫害の中に成長する児の宣言	波谷定輔	四〇
無 題	野村吉哉	四一
三角形の太陽	野村吉哉	四二
ガキの死	野村吉哉	四三
愛と憎しみ	岡本 潤	四三

夜から朝へ……………	岡本潤……………	三四
号外……………	岡本潤……………	三四
贅沢な乞食……………	岡本潤……………	三四
頭の中の兵士……………	壺井繁治……………	三四
内部の断層……………	壺井繁治……………	三四
坂に喘ぐ馬……………	壺井繁治……………	三四
夜明け前のさよなら……………	中野重治……………	三四
歌……………	中野重治……………	三四
無産者新聞第百号……………	中野重治……………	三四
山東へやった手紙……………	三好十郎……………	三五
職代……………	三好十郎……………	三五
大川がだまって流れる……………	三好十郎……………	三五
セカイノトモダチヨ……………	坂本遼……………	三五
悲劇……………	坂本遼……………	三五
プロレタリアの唄……………	上野壯夫……………	三六
考えを建てなふそう……………	西沢隆二……………	三七
憤怒……………	西沢隆二……………	三七
荒縄……………	西沢隆二……………	三七
俺たちは伝えよう……………	秀島武……………	三八

妹	へ	秀島	武	三六九
早	春	森山	啓	三六〇
松葉杖の廃兵		森山	啓	三六一
プロレタリアの魂		大森二	郎	三六三
反資本主義		緒方貞	翁	三六四
同志の歌		窪川鶴	次郎	三六五
吹雪の中		三川秀	夫	三六六
兄弟のために		久保田	経	三六八
戦争を克服せよ		小林國	夫	三六九
プロレタリアの詩		小林國	夫	三七〇
彼を倒せ		長谷川	進	三七二
夜明けの集会		波立	一	三七三
詩論				
郷土望景詩に現れた憤怒		中野重	治	三七六
短歌				
「第一の街」抄		西村陽	吉	三八四
「貧乏の歌」抄		渡辺順	三	三八五
「黎明を行く」抄		清水信		三八六
「土の歌」抄		中村孝	助	三八七

「空に咲く花」抄……………後藤史郎…三八九
「青木集」抄……………田辺駿一…三八〇

俳句

解

説「文芸戦線」創刊からナツプ成立まで……………

浅野純一…三八〇
和田久太郎…三八二
栗林一石路…三八六
橋本夢道…三九七
平野謙…三九九

年

表（一九二四・一―一九二八・三）……………日本近代文学研究所編…四三三

I
小
説

淫売婦

葉山嘉樹

此作は、名古屋刑務所長、佐藤乙二氏の、好意によって
産れ得たことを附記す。——一九二三、七、六——

一

若し私が、次に書きつけて行くようなことを、誰から、「それは事実かい、それとも幻想かい、一体どっちなんだい？」と訊ねられるとしても、私はその中のどちらだとも云い切る訳に行かない。私は自分でも此問題、此事件を、十年の間と云うもの、或時はフト「俺も怖いことこの体験者だなあ」と思ったり、又或時は「だが、此事はほんの俺の幻想に過ぎないんじゃないか、ただそんな風な気がする」と云う丈けのことじゃないか、でなけりや……」とこんな風に、私にもそれがどっちだか分らずに、この妙な思ひ出は益々濃厚に精細に、私の一部に彫りつけられる。然しだ、私は言い訳をするんじゃないが、世の中には逆も筆

では書けないような不思議なことが、筆で書けることよりも、余っ程多いもんだ。たとえば、人間の一人一人が、誰にも云わず、書かずに、どの位多くの秘密な奇怪な出来事を、胸に抱いたまま、或は忘れたまま、今までにどの位死んだことだろう。現に私だって今ここに書くことすることよりも百倍も不思議な、あり得べからざる「事」に数多く出会っている。そしてその事等の方が遙に面白くもあるし、又「何か」を含んでいるんだが、どうも、いくら踏ん張ってもそれが書けないんだ。検閲が通らないだろうなどと云うことは、てんで問題にしないでいても自分で秘密にさえ書けないんだから仕方がない。

だが下らない前置を長ったらしくやったものだ。

私は未だ極道な青年だった。船員が極り切って着ている、続きの葉っぱ葉服が、矢張り私の唯一の衣類であった。

私は半月余り前、フランクテンの欧州航路を終えて帰った許りの所だった。船は、ドックに入っていた。

私は大分飲んでた。時は蒸し暑くて、埃っぽい七月下旬の夕方、そうだ一九一二年頃だったと覚えてる。読者よ！ 予審調書じゃないんだから、余り突っ込まないで下さい。

そのムンムンする蒸し暑い、プラタナスの散歩道を、私は歩いてた。何しろ横浜のメリケン波止場の事だから、

些か恰好の異った人間たちが、沢山、氣取ってブラついて
いた。私はその時私がどんな階級に属しているか、民平
——これは私の仇名なんだが——それは失礼じゃないか、
などと云うことはすっかり忘れて歩いてた。

流石は外国人だ、見るのも氣持のいいようなスッカリし
た服を着て、沢山歩いたり、どうしても、どんなに私が自
惚れて見ても、勇氣を振り起して見ても、寄りつける訳の
ものじゃない処の日本の娘さんたちの、見事な——一口に
云えば、ショウウインドウの内部のような散歩道を、私は
一緒にあって、悠然と、続きの葉葉を見て貰いたいた
めでもあるように、頭を上げて、手をポケットで、いや、
お恥しい話だ、私はブラブラ歩いて行つた。

ところで、此時私が、自分と云うものをハッキリ意識し
ていたら、ワザワザ私は道化役者になりやしない。私は
確に「何か」考えてはいたらしいが、その考えの題目とな
っていたものは、よし、その時私がハツト氣がついて「俺
はたつた今まで、一体何を考えていたんだ」と考えて見て
も、もう思ひ出せなかつた程の、つまりは飛行中のプロペ
ラのような、「速い思い」だったのだらう。だが、私はそ
の時「ハッ」とも思わなかつたらしい。

客観的には憎つたらしい程凶々しく、しっかりとした足
どりで、歩いたらしい。しかも一つ処を幾度も幾度もサロ
ンデッキを逍遙する一等船客のように往復したらしい。

電燈がついた。そして稍々暗くなつた。

一方が公園で、一方が南京町になっている単線電車通り
の丁字路の処まで私は来た。若し、ここで私をひどく驚か
した者が無かつたなら、私はそこで丁字路の角だったこと
などには、勿論氣がつかなかつただらう。処が、私の、今
の今まで「此世の中で俺の相手になぞなりそうな奴は、一
人だつていやしいや」と云う私の觀念を打ち破つて、私
を出し抜けに相手にする奴があつた。「オイ、若けえの」
と、一人の男が一体どこから飛び出したのか、危く打っか
りそうになるほどの近くに突つ立つて、押し殺すような小
さな声で呻くように云つた。

「ビー、カンカンか」

私ボカンとそこへつたつていた。私は余り出し抜けた
ので、その男の顔を穴のあく程見つめていた。その男は小
さな蟬せみのような顔をしていた。私はその男が何を私にし
ようとしているのか分らなかつた。どう見たつてそいつは
女じゃないんだから。

「何だい」と私は急に怒鳴つた。すると、私の声と同時
に、給仕でも飛んで来るように、二人の男が飛んで出て来
て私の両手を確りと掴んだ。「相手は三人だな」と何と云
うことなしに私は考えた。——こいつあ少々面倒だわい、
どいつから先に蹴つ飛ばすか、うまく立ち廻らんと、この
勝負は俺の負けになるぞ、作戦計画を立ててからやれ、い
いか民平！——私は据えられたように立つて考えていた。
「オイ、若えの、お前は若え者がするだけの楽しみを、二

分で買う気はねえかい」

蛞蝓は一足下りながら、そう云った。

「一体何だってんだ、お前たちは。第一何が何だかさっぱり話が分らねえじゃねえか、人に話をもちかける時にや、相手が返事の出来るような物の言い方をするもんだ。喧嘩なら喧嘩、泥坊なら泥坊とな」

「それや分らねえ、分らねえ筈だ、未だ事が持ち上らねえからな、だが二分は持つてゐるだろうな」

私はポケットからありったけの金を攫み出して見せた。

もうこれ以上欲めないと思って、バーを切り上げて来たんだから、銀銅貨取り混ぜて七八十銭もあっただろう。

「うん、余る位だ。ホラ電車賃だ」

そこで私は、十銭銀貨一つだけ残して、すっかり捲き上げられた。

「どうだい、行くかい」蛞蝓は訊いた。

「見料を払ったじゃねえか」と私は答えた。私の右腕を掴んでた男が「こっちだ」と云いながら先へ立った。

私は十分警戒した。こいつ等三人で、五十銭やそこの見料で一体何を私に見せようとするんだらう。然も奴等は前払で取っているんだ、若し私がお芽出度く、ほんとに何かが見られるなどと思うんなら、目と目とから火花を見るかも知れない。私は蛞蝓に会う前から、私の知らない間から——、こいつ等は俺を附けて来たんじゃないかな——

だが、私は、用心するしないに拘らず、当然、支払った

だけの金額に値するだけのものは見得ることになった。私の目から火も出なかった。二人は南京街の方へと入って行った。日本が外国と貿易を始めると直ぐ建てられたらしい、古い煉瓦建の家が並んでいた。ホンコンやカルカッタ辺の支那人街と同じ空気が此処にも溢れていた。一体に、それは住居だか倉庫だか分らないような建て方であった。二人は幾つかの角を曲った挙句、十字路から一軒置いて——この一軒も人が住んでるんだか住んでいないんだか分らない家——の隣へ入った。方角や歩数等から考えると、私が、汚れた孔雀のような恰好で散歩していた、先刻の海岸通りの裏通りに当るように思えた。

私たちの入った門は半分丈だけは錆びついてしまつて、半分だけが、丁度一人だけ通れるように開いていた。門を入るとすぐそこには塵埃が山のように積んであった。門の外から持ち込んだもののだか、門内のどこからか持つて来たもののだか分らなかつた。塵の下には、塵箱が壊れたまま、へしゃげて置かれてあった。が上の方は裸の埃であった。それに私は門を入る途端にフト感じたんだが、この門には、この門がその家の門であると言ふ、大切な相手の家がなかつた。塵の積んである二坪ばかりの空地から、三本の坑道のような路地が走っていた。

一本は真正面に、今一本は真左へ、どちらも表通りと裏通りとの関係の、裏路の役目を勤めているのであったが、今一つの道は、真右へ五間ばかり走つて、それから四十五